

【書き下し文】

周処、年少き時、兇強俠気にして郷里の患ふる所と爲る。又た義興の水中に蛟有り、山中に遺跡の虎有り。並びに皆百姓を暴犯す。義興の人謂ひて三横と爲し、而して処尤も劇し。或ひと処に説きて虎を殺し蛟を斬らしむ。実は三横唯だその一を余さんことを冀ふ。処即ち虎を刺殺し、又た水に入りて蛟を撃つ。蛟或いは浮き或いは没し、行くこと数十里。処之と俱にし、三日三夜を経たり。郷里皆已に死せりと謂ひ更に相慶ぶ。

竟に蛟を殺して出て、里人の相慶ぶを聞き、始めて人情の患ふる所と爲るを知り、自ら改むるの意有り。乃ち往きて二陸を尋ぬ。平原在らず、正に清河に見ゆ。具に情を以て告げ、並びに云ふ、「自ら修め改せんと欲するも、年已に蹉跎たれば終に成す所無からん」と。清河曰はく、「古人朝に聞き夕に死するを責ぶ、況や君の前途尚ほ可なるをや。且つ人は志の立たざるを患ふ、亦た何ぞ令名の彰れざるを憂へんや」と。処遂に改励し、終に忠臣孝子と爲れり。

【現代語訳】

周処は若かった時、力が強く暴れん坊で郷里の人々から厄介者と思われていた。また、義興の湖の中には蛟がいて、山の中には虎がうろろしていた。郷里の百姓たちに乱暴をはたらいていた。義興の人々はこれらを「三横」と呼び、その中でも処が最も乱暴であった。ある人が処に、虎を殺し、蛟を斬るように説得した。本当のところは三横のうち一つだけを残すように願った。周処はすぐに虎を刺し殺し、水中に潜って蛟を撃った。蛟は浮いたり沈んだりしつつ、数十里進んだ。処は（流れていく）蛟と一緒に流され、三日三晩が経った。郷里の人々はみな、周処はすでに死んだと言って、みんな喜んで。

周処はついに蛟を殺し水中から出て、郷里の人々が喜びあっていることを知り、そこで初めて自分が郷里の人々から嫌われていることを知り、自分から（生き方を）改めようという意志を持った。そこで文人として名高い二陸兄弟を訪ねて行った。平原（陸機）は不在で、清河（陸雲）にお会いすることができた。周処は細かく事情を説明し、あわせて言った。「自らの学び改めたいと思うが、私は年齢がいきすぎている時期を逸して、結局うまくいかないでしょう」と。清河が言うには「昔の聖人は『朝に学んだら、夜には死ぬ』という生き方を大切にしたら、と言うくらいだから、ましてやあなたのは言うまでもない。また、人は将来の見通しが立たないことを悩むものであって、どうして名声が世の中に現れないことを悩む必要があるのか、いや必要ない」と。周処はついに生き方を改め、忠臣、そして孝行息子となった。